

郷土を愛する人々の雑誌

# 神戸っ子

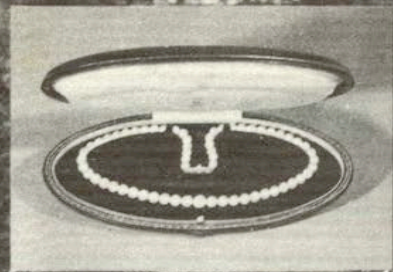
1962/4

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO APRIL 1962 NO.14



L'Espagnol

K. Camara



100粒の中から5ツ  
100粒の真珠の中から  
平均して5ツ ミキモト  
の名にふさわしいツブよ  
りの輝きは こうして選  
ばれるのです。



## 御木本真珠店

神戸店:

神戸国際会館 TEL 22-0062

大阪店:

新大阪ビルデングTEL 361-0220

---

本店 - 東京銀座四丁目



これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



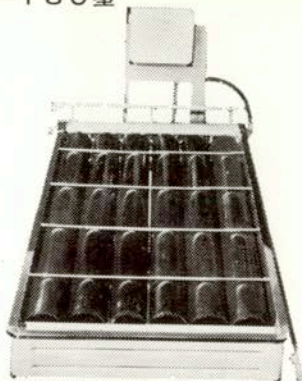
# 神戸と女性

星空ひかるさん

(宝塚スター)

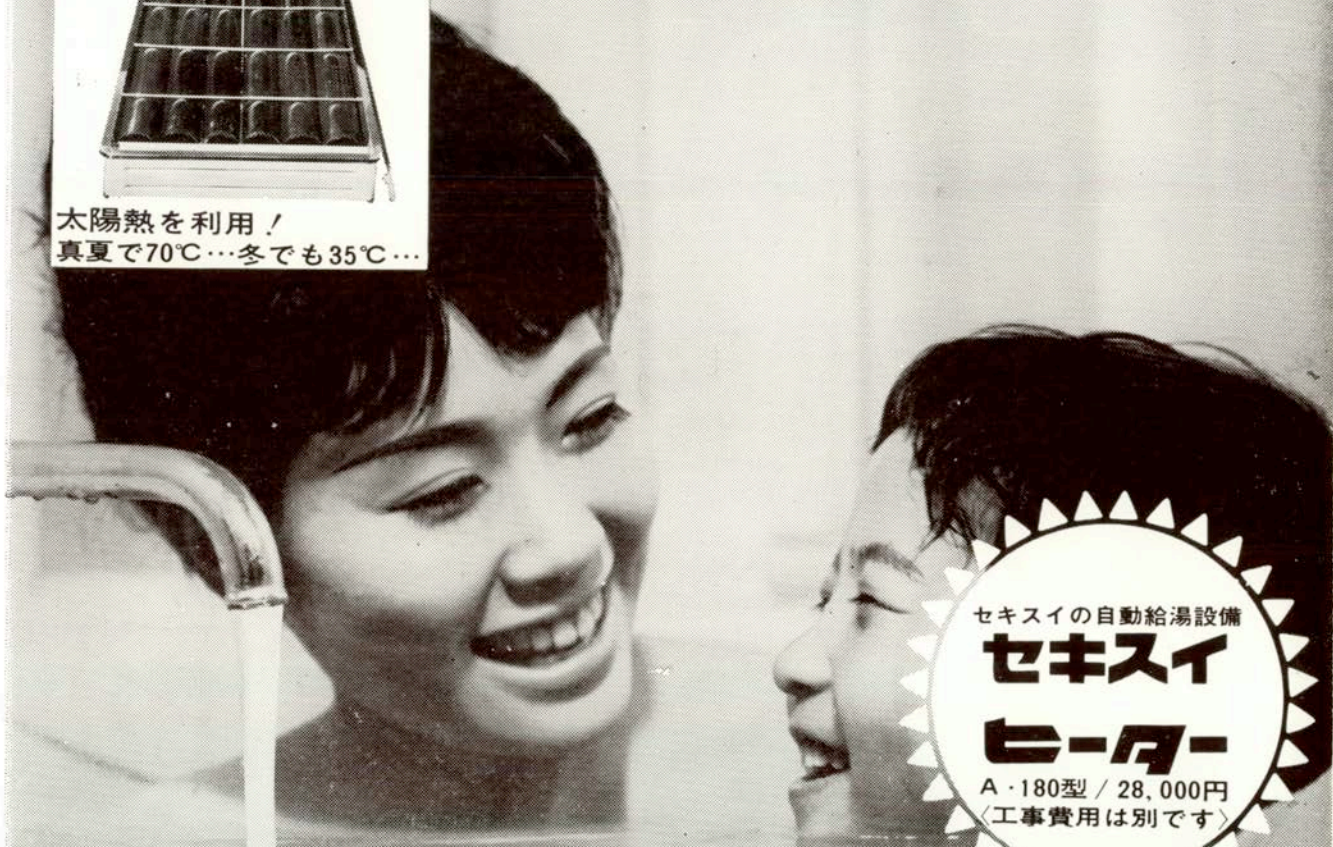


A-180型



太陽熱を利用!  
真夏で70℃…冬でも35℃…

\* 太陽熱で  
お湯をわかそう!



セキスイの自動給湯設備

**セキスイ**

**ヒーター**

A・180型 / 28,000円

〈工事費用は別です〉

● 手軽でべんりなホーム・ボイラー

おフロに…お洗たくに…燃料費がグッと安くなります

プラスチックの積水化学



## 目 次

PHOTO / 神戸と女性・星空ひかる	1	35 座談会 / 神戸とミステリー・陳舜臣・西田政治他
れんさい随想⑩ / 春じゃもの・阪本勝	4	38 PINK CORNRE
ずいそう / 取材の時の話・佐多稲子	9	40 随想 / 神戸と私と探偵小説・島久平
問わず語り② / 男の魅力・司馬遼太郎	12	43 BONSOIR MADAME
私の好きなスター / 森光子さん・前田三公	17	44 神戸うまいもの地図
神戸だからえがく夢 No.6. 藤本義一	18	46 KOBEEKO SHOPPING GUIDE
神戸を創るトップグループ / 神戸中央合唱団	21	50 ショートショート③ / 落着き払った悪党・陳舜臣
花時計・レリーフ / 青木重雄・草野	22	64 1店紹介 / マキシム婦人帽子店
初夏のスポーツウエアー / 福富芳美	32	55 神戸っ子の集い

表紙 / 田村孝之介・カメラ / 杉尾友士郎・米田定蔵・デザイン / 橘昭三

# 春じやもの

阪本  
え・中西

勝勝

春や春さくら吹きちる丘のべにもろ手  
うち振り吾子（あこ）踊る見ゆ

山ざくら吹きちるなかにあれや小弓（こゆみ）  
胡蝶を追ひて迷ひ入りけり

戦後約五年間、有馬温泉の浪居で、ぼくはさびしい追放生活をした。そのときひとり娘の小弓（こゆみ）は三才のいとけないわらべであった。

上記の二作は、小弓が春にうかれて無心に遊んでいる姿を歌ったものである。

その小弓が今はもう十八才。この春高校を出て大学に入學した。ここ一、二年、かの女にひとつの悩みがあった。それはほんの二三点のニキビだ。薬をつけたり塗ったりしていたが、青春のしるしはいっこう消えさうにない。

「おまえはバカだなあ。そんなことしていてニキビがなおるもんか。よし、お父ちゃんがいい薬を買ってやる」

そういってぼくは、東北秋田の友人から、かねてきいていた手製の薬を送って貰った。

かの女は毎日それをのんだ。さあ半月も続けたらどうか。ニキビはしだいに影をひそめて行った。やがて一点の跡方もなく消え去っ



た。

世のむすめさんたちよ。悩みたもうことなかれ。兵庫県知事、ここに秘伝を公開いたそう。春じゃもの。

まず山に行つて檜(ナラ)の樹の枝をきつて来たまえ。それを焼くと白い純粋な灰になる。それにカルシュームの粉末を混ぜる。製法はただそれだけでいいんだ。その粉を茶サジに半分ぐらいづつ一日三回服用する。一ヶ月もすれば効果はかならず現われて、処女の皮膚が春光のもとに白玉のごとく輝やくであろう。念のためいっておくが、幾多の実験すみだ。

◇ 「ねえ、お父ちゃん……」

小弓はぼくのことをまだちやんと呼ぶ。

「ああ、春はすばらしいわ。こんな日に、むすめといっしょに元ぶらでもして、何か買ってやる人生の喜びに浸りたくないのかなあ……」

もうこれで負けだ。ぼくはかの女とつれだって、商店街のあちこちを散歩する。ぼくはだいたい百貨店というものを好かない。だからほとんど行ったことがない。いやしくも神戸っ子たるものは、さそうと商店街を歩け。

「ねえ、このマブラ、シャーヤと思えへん？ シャーヤわ、シャーヤわ。ね、ね、ね、……」

「よち、よち、よち……」

「これもシャーヤわ、シャーヤわ、ねえ、ねえ……」

「よち、よち、よち、……」  
てなぐあい、あれもこれも買わされて、人生の喜びに浸らされた。

このごろの女の子は、きれいとか、美しいとかということをも何でもシャーという。ドイツ語のなまりだ。ぼくらは学生時代にジャンといった。「とても美人だなあ」というのを「トテジャンだなあ」などといったものだが……

買物を終ると、おきまりのように、不二屋にはいる。たべものは



アイスクリームにきまわっていて、ぼくが二はい、むすめが一はいとケーキ。

むこうの席にトテシャンがいたりすると、ぼくはついちらちらその方を見る。するとむすめがうしろを振りかえって、

「まあ、お父ちゃん！お母ちゃんにいうよ！」

などとぬかす。まいました。パパ春情相催候。



ぼくにはことし四つになる孫がある。ぼくがク小凧（コナギ）と名づけた。女の子はさすが発育が早く、なかなかませている。ことしの春は急に智恵ついて来て、あきれられるようなことを口にすることしばしばだ。電話も自分でかけて来る。三月二十九日のセンバツ高校野球大会のとき、ぼくは甲子園球場の始球式で暴投した。それをテレビで見ていた小凧は、さっそくおばあちゃんに電話して来たそうだ。

「おじいちゃんのいまのボール、トテもはなれていたよう。あかんねえ……」だと。

先日ぼくは長男の家に立ちよった。そして一ぶくのタバコをすおうとした。ぼくはホープの常用者だが、ホープにはフィルターがついている。ぼくはあやまってそれを反対に口にして火をつけた。すると孫がそばから、

「おじいちゃん、ちがうよう……」

というから、気がついて向きをかえてすいかけた。火がついていたから、

「あちっっ！」

とさげんだ。このとき小凧が何といったかと、みなさん思いますか。

「知らぬがホトケ……」  
だつて。

これが満五つの女の子のことばと思えますか。負けた。負けた。負けてたのしい。春じゃもの。

（兵庫県知事）



世界の人々に愛されるキタムラパール



北村パール

北村眞珠株式會社

神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター  
TEL(3)0072(571)8032

世界中の人からほめられた

日本の誇り 神戸のほまれ

マロング  
ラツセは  
ヒロタの  
銘菓

元町通三丁目 TEL(3)二三四〇番

英国製  
ツータルタイ  
新輸着

¥950

TOOTAL  
TIES

WASH SUPERBLY  
MADE IN ENGLAND

ネクタイの

元町バザー

神戸・元町



オシャレをたのしむ帽子の店

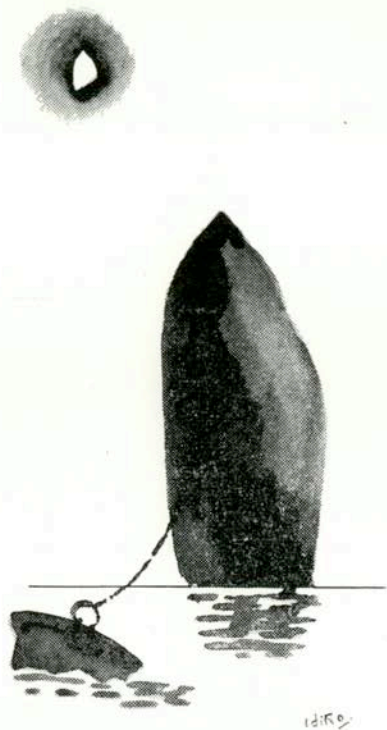
マキシン

トア・ロード TEL③6711~3

ずいそう

# 取材のときの話

佐多 稲子  
え・松本 宏



昨年ある週刊誌に連載の仕事をしたとき、船会社に働いている女性を小説の中心においた。息子の中学のときの友達で、ある船会社に勤めている人がある。その人からいろいろ話を聞いているうちに私の小説の中の女性を船会社に勤務させようとおもいついたのである。仕合せにも、その船会社に、大変潤達な女性が現実にはいられてその人から会社での仕事ぶりを見せてもらいもし、船員と家族との話なども聞かせてもらった。そして私は何度か、外国航路の大きな船にも訪ねてゆき、船員さんたちの話を聞いたりした。

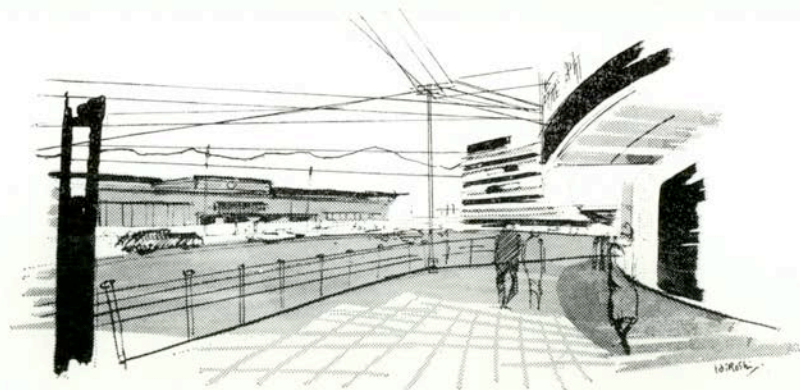
私は長崎が故郷だし、父親が造船所に勤めていたから、海も船もわりあいになじんでいる。海の旅行をしたこともある。が、その時芝浦に船を訪ねるというので税関棧橋からサンパンに乗ったが、海へ出るのは久しぶりであった。沖で揚げ荷をはじめたばかりの大きな貨物船は、まだ積載している荷の重量で、船体を深く沈め、サン

パンからその船に移ろうとして足をかけるタラップはまるで横になつていて、却つてこわいようであつた。帰るときはもうそのタラップが普通の角度に縦になつていた。それだけ揚荷がすすんで、軽くなつた船体が浮いたのである。そんなことが実際にわかつておもしろかつた。船倉の中におびただしい量で積まれたスクラップが、あれはみんな廃品になつた自動車だと聞いたときもびくりました。やや大きなトランクぐらゐにまとめられたものがいっぱい積まれている。言われてみれば、全体くすんだ中に赤や青の色彩を混じえている。それはきつと華やかにすべつていたときの自動車の色だつたのだ。くしやつとつぶされているから、妙に柔らかに見えた。ピカピカに光つていたときを想像して、この末路を考えもしたが、それよりもこんなに廃品になるのかとその大量の数におどろいた。外国から帰つてきた貨物船の荷は、こんなスクラップであつたり、まっ赤な鉄鉱石であつたりした。

乗務員のところに子ども連れの家族が訪ねてきているのに逢うこともあつた。また上役の船員さんで、これから上陸して汽車で地方のわが家まで帰るといふ人もある。自分の船が出航するまでの三日か四日の短い日数の間のことだから、寸時も惜しい。そういう人に逢つたり、話を聞いたりしていると、船員の家庭生活の気の毒さがおもわれた。船員さんたちの話もやはり、そのことになつて、年配の機関長も、自分の結婚したのはもう二十年昔のことだが、実際の結婚日数は、二年ぐらゐにすぎなからう、と言つたりした。そういう話のとき、ひとりの未婚の青年が自分の経歴を語りだした。

それは見合いをしたときの話なのだ。彼は相手の女性にむかつて自分の職業の、家庭生活には恵まれないことを言い、それでもいいのか、と尋ねたという。すると相手の女性の答えがあんまりはしたくないことだつた。相手の女性は自分もある仕事を持っている人だつたそうだが、こう答えたという。

自分も仕事を持っているから、夫が始終そばにいない方が却つていいのだ、だから船員をのぞんだのだ、と。何だか、興味索然としてしまひましてね、と、その青年は笑つたが、聞いている私は、自



分も女だから、その女性に代って詫びを言わねばならぬようなおもいになったりした。そばにいた人々も青年の興冷めた気持に同情して、それじゃ、亭主はアクセサリーかなどと辛らつな言葉をもらした。船員という職業のいたし方なさで、つねに、家庭に対しては満たされぬおもいを抱いている人々としては腹立たしい気もしたにちがいない。その満されぬおもいは、夫だけでなく、妻の方にも深刻なはずで、だからこそ二、三日の短い日数でも、夫は飛んで帰るわけだし、妻の方では、帰航の日を調べて船まで逢いにゆくのだ。これから結婚しようという先きに、女の側の都合で、夫の留守がちの方がいいのだ、などといわれれば、それは興冷めだろうし、いわば人間的ではない。その女性の不用意に、ひよいと言ってしまったことだったろうけれど、それは手を傷つけ、同時に自分をも卑しめてしまったことだったかもしれない。

こんな話も聞いたりして、船員の生活を少しばかり知った私は、次の小説にも、船乗りの家庭を書いているその作中の妻は、夫の帰航さが神戸だったとき、東京から夫に逢いに、神戸まで出むいて行った。私自身もたまたま、昨年の初夏のとき神戸の町を歩く機会にめぐり合せたが、私の作中の人物が神戸へ行ったのは、私より一足先きのことだった。だから私は棧橋のあたりや元町を歩きながら作中のあの妻は、上陸した夫と一緒にここを歩いたかしら、などとひとり胸の中で作中人物に語りかけていた。

(作家)



佐多稲子さんのこと

明治37年長崎市生まれ、小学五年で中退、女工、店員などを転々したのち、評論家の窪川鶴次郎氏と結婚したが戦後、離婚。昭和3年『プロレタリア芸術』に「キャラメル工場から」を発表したのが作家としての第一歩で、作品はいずれも清潔で格調高く「くれなゐ」「素足の娘」「私の東京地図」「体の中を風が吹く」など。